

〔(公)病害虫防除試験（農林水産部食料安全課所管）〕

未解明病害虫の原因究明および防除技術の検討

～父島におけるサツマイモヒサゴトビハムシによるヨウサイ被害の発生～

大林隆司・藤本周一*

(小笠原農セ・*営農研修所)

【要 約】2012年7月、父島においてヨウサイの葉を加害するトビハムシが発生し、サツマイモヒサゴトビハムシと判明した。ヨウサイ以外ではサツマイモや海岸植生のグンバイヒルガオで確認された。母島では未確認であった。性別は調査した全個体が雌であった。

【目 的】

2012年7月、父島内の複数のヨウサイ露地圃場において、葉を細かな線状に食害する微小なトビハムシの1種が発見された。このトビハムシの同定を行い、発生状況などを把握することで小笠原の野菜類の害虫対策に役立てる。

【方 法】

父島のヨウサイを加害したトビハムシを同定するとともに、父島・母島における発生状況を調査した。また、成虫を10%水酸化カリウム水溶液で70℃、30分間以上処理し、ネオ・シガラール液（株式会社 志賀昆蟲普及社製）で簡易プレパラートを作成し、雌雄を調査した。

【成果の概要】

1. 発生していたトビハムシを小笠原総合事務所経由で横浜植物防疫所に送付し同定を依頼した結果、サツマイモヒサゴトビハムシと同定された（図1）。成虫の体長は1.5mm前後。本種は海外では北米、台湾、パラオ諸島、アフリカなどに分布し、国内では1998年に沖永良部島と徳之島で初めて記録され、その後、琉球諸島、奄美諸島、種子島、鹿児島県薩摩半島、宮崎県で確認されている。
2. 本種成虫によってヨウサイの葉が食害されると、細かな線状の食害痕が多数残り、商品性が低下した（図2）。
3. 父島内の複数のヨウサイ圃場およびサツマイモ圃場を調査した結果では、ヨウサイ圃場では3地点中2地点で、サツマイモ圃場では2地点中1地点で本種の発生を確認した。また、海岸植性であるグンバイヒルガオでは父島で調査した2地点のうち1地点で発生を確認した（図3）。なお、母島のヨウサイ栽培圃場では発生は確認できなかった。
4. 簡易プレパラートを作成し11個体の雌雄を判別した結果、全て雌であった。
5. まとめ：サツマイモヒサゴトビハムシのヨウサイでの発生を確認した。本種は小笠原諸島からは初めての記録である。現状では本種を防除する登録農薬は無いため、対策として、目の細かい防虫網（目合1mm以下）で覆うなどして成虫の侵入を防ぐ。
6. 留意点：小笠原諸島からは、ヨウサイやサツマイモ等のヒルガオ科植物の持ち出しが規制されている。また、本種は雌性単為生殖を行うため、1個体でも増殖が可能で、幼虫はサツマイモ塊根の表皮を加害するため、焼酎の原料などとしてサツマイモの栽培が行われている地域では、今後、侵入への警戒が必要である。なお、本種については、2012年10月23日付で東京都病害虫防除所より「病害虫発生予察 特殊報」として発表した。

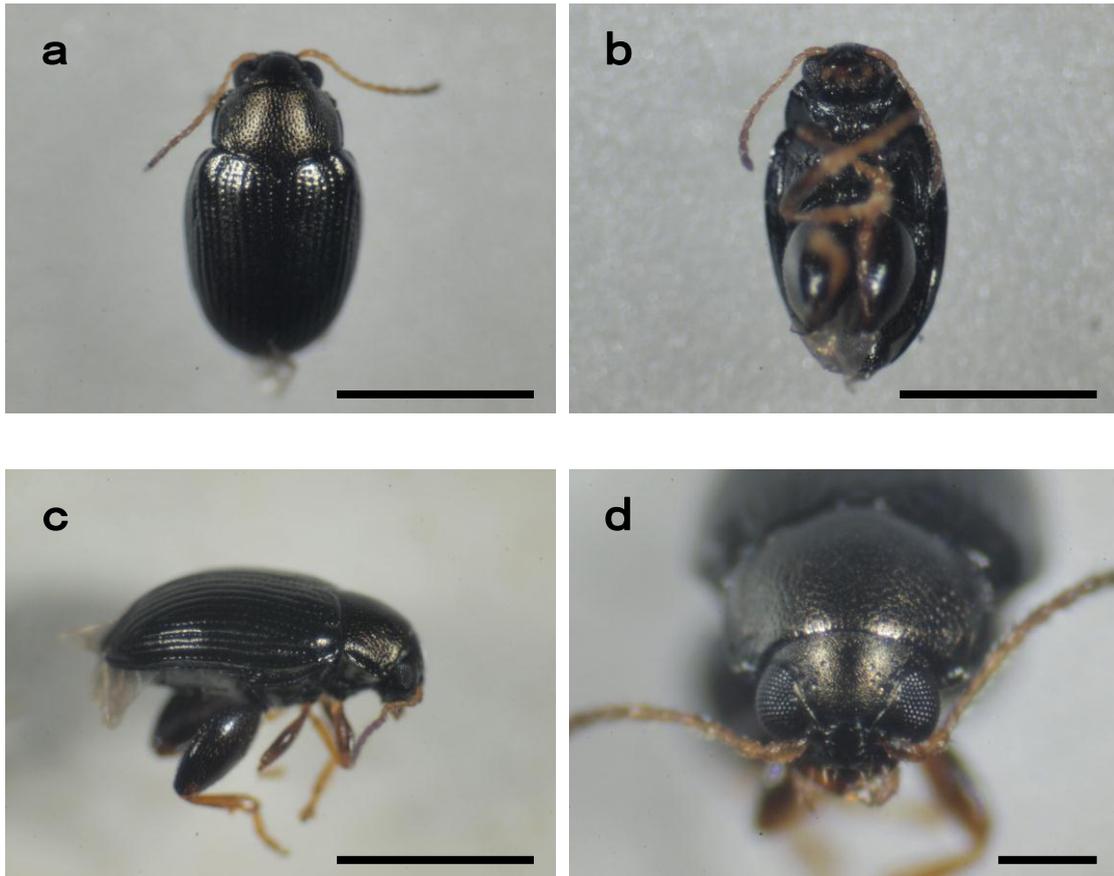


図1 サツマイモヒサゴトビハムシ成虫 (a : 背面, b : 腹面, c : 側面, d : 頭部)
スケールバー : a ~ c : 1 mm, d : 0.2 mm。

だ円形で、ブロンズがかった黒色。上翅には列状に強い点刻が認められる。
後脚腿節の幅が極めて広く、触角および脛節は赤みがかった黄色。
前頭部の触角間は広く、ほとんど隆起せずほぼ扁平（近縁種との区別点）。



図2 サツマイモヒサゴトビハムシ成虫
によるヨウサイ葉の食害痕



図3 グンバイヒルガオ葉上（中央）の
サツマイモヒサゴトビハムシ成虫